

靴の歴史散歩 ⑤9

皮革産業資料館 常任委員 稲川 實

〈前号より続く〉「そうだ、あの銅像をもう一度詳しく見てみよう」という辺りから、小説『日本の靴』は、本題へと入ってゆく。

本題に入るといっても、作者自身が「常套的な小説化は避け、素材をそのまま書きしるす方法に出ることにした。」とあるように、参考文献を挙げては、西村勝三の人物像や、事蹟を掘り起こす進め方だから、小説らしからぬ小説、といえるかもしれない。

参考文献の最初は『伝記大日本史』『実業家編』で、続いて石井研堂の『明治事物起原』、河野桐谷の『漫談明治初年』、そして『伝記大日本史』『陸軍編』、喜田川守貞の『類聚近世風俗史』、『西村勝三伝』、山路愛山の『勝海舟』、『東京靴同業組合史』と目白押しに並び、これによって、小説そのものが展開してゆくのである。

以上の文献は、西村勝三を識る上で、よく知られた資料ばかりである。作品から、新発見とか新事実のようなものがあれば、と期待したが、これは残念ながらなかった。がしかし、西村勝三を主人公にした小説を書いたのは、数多い作家の中で、高見順只一人である。心からありがとうといたい。

小説の終章近くに、篠田鈺三の『銀座百話』から「日本人靴屋に蘭人の入智」（「靴の歴史散歩」②参照）をとりあげ、そこに登場する「和蘭陀人レコンシャン（靴商磯村安兵衛の娘ステの智養子）」とは、西村の製靴教師レマルシャンの事ではないかと悩み、そのためにわざわざ、向島の銅像傍らに立つ『靴工列馬耳尚君之碑』（「靴の歴史散歩」⑦参照）を確かめに行ったりしている。

そしてその碑文の中に「籍は磯山に入れ、その業績をますます拡張した」とあるのを読んで、またまた混乱してしまう。小説の中では、悩んだ末に「どうも私は、同一人物のように思われ

てならない。」と結んでいる。

この顕彰碑は、土地売却の昭和38年まで、57年間同所にあったが、「磯村」と彫るべきところを「磯山」と彫ってしまった、関係者にとっては痛恨の碑だったのである。建立以来、修正されないままあったことを、泉下の高見順にも伝えたい。

さて、小説『日本の靴』は、こんな風に終わっている。「……そこには綾部平輔、関根忠吉など草分時代の靴屋の先覚者たちの碑が、西村勝三の銅像を中心にしてぐるりと建っている。銅像の周囲の公孫樹の葉は既に黄色く、風にはらはらと落ちてくる。私はその葉を浴びながら、しばらくの間、銅像の前に立っていた。」と。



挿画は、藤牧義夫の『隅田川絵巻』（昭和10年）の内「西村勝三の銅像附近」（『別冊太陽・モダン東京百景』より）

かわとはきもの No.114

2001年1月31日発行

登録番号 12) 8

発行／東京都立皮革技術センター台東支所
〒111-0023台東区橋場1-1-6

TEL (3876) 2972ダイヤルイン

印刷／株式会社 第一印刷所

〒110-0003台東区根岸2-14-18

TEL (3871) 4 2 6 1 (代)

本紙表紙記事の無断転載を禁じます。

R70

本文は古紙配合率70%再生紙を使用しています